

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 2 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370743

研究課題名(和文) 異文化接触が異文化対応力とコミュニケーション志向性に与える影響のアセスメント

研究課題名(英文) Influence of intercultural contact on intercultural competence and willingness to communicate

研究代表者

八島 智子 (Yashima, Tomoko)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：60210233

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、スタディ・アブロードが若者の異文化対応力とコミュニケーション志向性に与える影響を、主として英語教育の観点から調査した。横断的量的調査、インタビューや観察による質的調査など様々な手法を用いて、留学の成果として、英語でのコミュニケーション志向性が高まったこと、アカデミックな場面での議論参加意欲と技術の向上、積極的な対人関係成立への意欲の向上を確認した。また異文化接触経験により、国際的志向性(国際問題への関心や異文化に対するオープンな態度など)が高まる傾向があることも確認した。さらに、より良い成果を引き出すための留学前の指導のあり方についても一定の示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：A series of studies were conducted to investigate the effects of study abroad experiences on young participants' willingness to communicate in English and intercultural competence. A mixed-method approach was adopted, with a cross-sectional quantitative study, qualitative studies using interviews and observation as well as an interventional study. The results indicate that students acquired skills and enhanced willingness to communicate in academic discussion situations as well as in building interpersonal relations during study abroad. A quantitative study confirmed that those who experienced study abroad and/or had other intercultural experiences had higher level of international posture including open attitudes toward intercultural partners and interest in international affairs.

研究分野：応用言語学・異文化コミュニケーション

 キーワード：コミュニケーション志向性 スタディ・アブロード 国際的志向性 英語使用不安 英語学習動機 第
 二言語習得 異文化接触 グローバル人材

1. 研究開始当初の背景

グローバル化する社会では、多様な背景を持った人々とコミュニケーションを通して自らの意思を伝えることのできる人材が囑望されているにもかかわらず、日本人の若者の内向き志向が指摘されている。こういう中で最近大学などのカリキュラムの一環として、一年間のスタディ・アプロードが組み込まれるなど、教育的な異文化接触の機会を創設する努力はされているが、その効果のアセスメントや、どのような準備をすればより大きい成果を引き出せるかについては、まだ十分は研究が蓄積されているとは言えない。

2. 研究の目的

スタディ・アプロードが若者の異文化対応力とコミュニケーション志向性に与える影響を、英語教育の観点から調査する。特に、英語コミュニケーション志向性(willingness to communicate)、英語学習動機付け、その他の情意的側面に注目する。具体的には、(1)スタディ・アプロードを翌年に控えた、大学一年生を対象に、英語によるアカデミックな議論において自ら進んでコミュニケーションを図ろうとする志向性に働きかける介入を行い、その効果を分析し、課題を明確にする。(2)英語圏へのスタディ・アプロード参加者数名を対象にケーススタディを行い、留学中のアカデミックな状況及び、異文化背景を持った人との接触状況を把握し、留学前後で、英語力、英語コミュニケーションへの志向性、及び異文化対応力がどのように変容したかについてのアセスメントを行う。(3)異文化接触経験のある大学生と経験のない大学生を対象に大規模調査を行い、国際的志向性、異文化に対する態度、英語コミュニケーション志向性などを比較し、異文化接触の効果のアセスメントを行う。(4)以上の目的に加えて、本研究では、学習者の変化を的確に捉えるための研究法の研究も行う。本研究においては、量的研究、質的研究の両方を用いるが、特に、CDST(複雑系理論)に基づく新たな研究法やインタビューの分析方法としてのグラウンディッド・セオリーなどを用い、新たな研究法や、多様な研究法を組み合わせることによってどのような知見が得られるかについての示唆を得る。

3. 研究の方法

(1)スタディ・アプロードを翌年に控えた、大学一年生 21 人を対象に、一セメスタに渡り、毎週、多様なトピックでの議論に参加するように介入型実践を行う。その中で、いわゆる I-R-F(Initiation-Response-Feedback)シーケンスを避け、教師から当てられるのを待って発言するのではなく、自ら進んで意見の表明を行うことを奨励した。その介入の結果を、観察、質問紙、インタビュー、毎回のリフレクションという混合法でデータを取り分析した。

(2)英語圏へのスタディ・アプロード参加者 4 名を対象に、出発前と帰国後に記述式の質問紙を実施し、その内容についてさらに詳細の説明を得るという形式で 1 時間程度のインタビューを実施した。さらに、出発前と帰国後に受験した、英語力試験(ITP TOEFL)の結果やその他授業担当者から見た特徴なども補助的資料として、ケーススタディを行った。

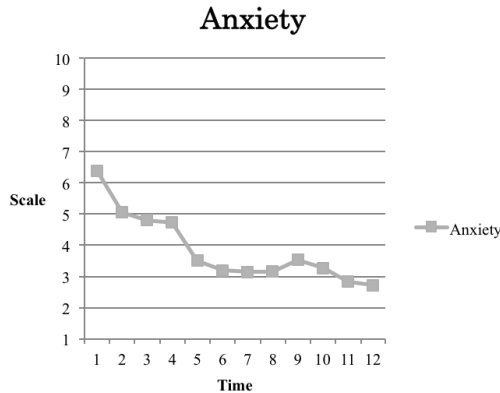
(3)2000 人を越える大学一年生を対象に、質問紙調査を行い、異文化接触経験(海外経験)の有無によって、英語コミュニケーション志向性(willingness to communicate、以後 WTC)、英語学習動機付け、国際志向性などに差が見られるかを統計的に分析した。

4. 研究成果

(1)教師主導の議論ではなく、学習者に議論進行のイニシアティブを移譲するという介入を行い、学習者の行動の変化やその心理を分析した。日本の大学の英語の授業では、学習者が発話する時間が極めて少ない(全体の 5%)との報告がされていたが(King, 2013)、今回の介入では、12 回の議論の中で学生の発話量は議論にとった時間 20 分の 19%~66%(平均で 46%)という結果であった。つまり介入により発話量を増やすことができることを確認した。また、このパラツキの要因については、CDST に基づく研究法を用いて分析し、複雑な外的・内的要因が相互作用して、発言のシーケンスや沈黙を生み出すことを見出した。学習者の反応については、次のように分析できる。自ら責任を持たされた学生たちは、個人差があるものの、議論のリーダーシップを取って、多くの人にターンを回そうとする学生、なんとか一回は発言しようとして、予習をして、発言内容を考えてくる学生、発言量の多い学生の発話を傾聴しスキルを学ぼうとする学生、発言は少なく静かだが、議論の流れはしっかり追っている学生など、それぞれの課題と学びの質が浮き彫りになった。次年度にスタディ・アプロードが待っており、それに向けて積極的なコミュニケーションを図ることが必要という意識を持っていたため、これが、なんらかの方法で議論を進めようという力になっていったと思われる。

また外国語不安についても、毎回どの程度緊張したかを 10 段階で測定させたところ、その全体の平均値は、下の図のように、4~5 回目あたりまでにかかなり不安が低下しており、その後は 10 段階の 3 ぐらいの水準で横ばいになっている。こういう実践を続けることで、学習者は緊張に慣れてくるようである。

この分析は、CDST の枠組みで行われ、多様な要因が複雑に相互作用した結果、学習者の発話・沈黙のパターンが生み出されることを示している



(2) 言語使用不安、WTC, 国際的志向性などにおいて、それぞれ異なった特徴を持った4人の学生(以後ここでは学生A、B、C、Dと言及)について、面接調査を中心に、留学の影響や留学を通しての学びをどのように捉えているかを分析した。留学前後の面接調査については、全てを書き起こした上で、オープンコーディングによりいくつかの概念を抽出し、概念を中心に留学前後の面接における語り、質問紙調査におけるWTCや不安のスコアを参考にし、記述を質的に分析した。以下にそれぞれのケースの概要をまとめる。

学生Aは、日本語においてもコミュニケーション志向性が強く、高校時代に一年留学した経験があることから、英語コミュニケーションにも自信を持ちWTCが極めて高い学生であった。クラスの議論においてはリーダーシップを取りつつも、他の学生を議論に誘う配慮があった。イギリスの大学へのスタディ・アブロードでは、多文化背景を持った人々と寮での共同生活を通して、「多様な人々を受容する態度」を身につけた。さらに、英語を用いて人間関係を成立させる経験を通して、ますます英語コミュニケーションの自信が高まった。「知らない人との関係性を深めることに対する抵抗感の低下」にもつながった。またアカデミックな状況における議論についても、毎日のように議論の時間があり、留学生の中でフロアを取る難しさを特に感じていないと述べている。留学前は特にしていなかった準備についても、留学後は内容についてのリサーチをして自分の意見を確立しておくことの重要性を指摘している。キャリアオプションの広がりを見せ、海外での仕事に強い興味を示している。

学生Bは、外交的な性格で、日本語ではよく話をする方だが、英語のコミュニケーションの不安が強く、日本語のWTCと英語のWTCに大きな開きがある学生であった。留学前の議論では、十分に準備やリハーサルをすることで、毎回自分の意見を表明する努力をしていた。ニュージーランドでのスタディ・アブロードでは、当初は理解してもらえないこと

から葛藤を味わったが、伝えようという前向きな姿勢を続けていくことで、意思疎通ができ、友情関係の成立につながったと述べている。アカデミックな状況の議論において、強い自己主張をする中国からの留学生と出会うが、葛藤しながらも反論の機を捉えてコミュニケーションをすることで、相互理解につながったと述べている。この経験を通して「伝える努力の大切さ」を実感したようである。異文化との出会いはキャリア選択にも影響し、人と出会い、国際的な関わりのある仕事、例えば留学生をサポートするような職業を志向している。留学を通して英語力にも人間としても自信を獲得したと述べる。

学生Cも、留学前の英語コミュニケーション志向性や不安のレベル、議論の参加度などが平均程度であるが、マイペースで機会があれば発言するというタイプの学生であった。イギリスの大学において、多くのグループワークに取り組んだことから、英語を話す能力が向上したことを実感している。具体的には「会話や議論での反応の精度や速さ」が伸びたというように、自らの英語力を分析する能力にたけた学生であった。留学前の議論においては、自分より実力があると感じる人からその表現を学ぼうとしていた。今回のスタディ・アブロードにおいても、その同じ意識をネイティブスピーカーとの会話に適用し、「彼らの表現から学ぶ」ことに努めた。それをいつのまにか無意識で使っている自分に気づくという、自己分析をしていた。

友人との会話では、質問をすることで「相手に興味を持っていることを伝えられる」と友人関係を成立させていく上で必要となる言語使用スキルを把握しているようであった。アカデミックな議論においては、大抵発言の機会があり、周りのレベルに応じて、予習をして挑むクラス、余裕で議論のリーダーシップをとるクラスでの議論を経験した。キャリアオプションの広がりもみられ、「日本において英語を使う仕事」を志向している。

学生Dは、筆記試験においては高い英語力を示すが、留学前の議論においては自ら進んで一度も発言しなかった学生である。この傾向はWTCの低さや言語不安の高さでも確認されている。アメリカの大学でのスタディ・アブロードでは、ビジネスに関する学部の正規科目も履修したが、それは、「全てが議論であった」こと、内容を理解するのに予習が大変で、理解するのがやっとで発言はできなかったことを報告している。一方、語学学校での授業では、ペアワークなどを交えた、参加しやすい形式であった。留学前の一年次の議論を振り返り、自分の意見をまとめてから授業を受ければよかったと振り返っている。じっくりとした聞き手で寡黙だが議論をしっかり聞いている学生であった。スタディ・アブロードにおいてもリスニングの伸びを実感している。友人関係の成立においては、ミッションナリーのグループへの参加が重要な

役割を果たしたようである。

以上のように、4名はスタディ・アプロード先の大学や学習内容も様々であるが、それぞれに「異文化の相手との友人関係の成立」と「アカデミックな場面での議論への参加」という課題と向き合い、そういう中で、コミュニケーションへの志向性を発達させていった。TOEFL では測れない、ソーシャル・スキルや、態度の変化を垣間見ることができたが、TOEFL においても4人の平均で、留学前のスコア、479から、514に上昇した。

(3) 大学一年生を対象にした、大規模の横断調査では、調査対象のうち660人が海外経験があると回答し、2,162人が経験がないと回答した。ただし660人のうち70%が1ヶ月未満の短期滞在であり、約60%が英語圏と回答している。質問紙調査の回答についてこの2グループ間に差があるかないかを統計的分析したところ、異文化接触経験(海外経験)の有無によって、英語コミュニケーション志向性(WTC)、英語学習動機付け、国際的志向性において、海外経験のあるグループの方が有意に高かった。また、英語力については、自己評価(CanDo)においても、TOEFLのスコアにおいても、海外経験の有るグループが有意に上回っていた。

動機付けについては、より詳細な質問項目があり、その分析によると、海外経験のあるグループの方が、内発的動機が高く、英語を使う理想の自己像が明確に描けている傾向が見られた。

横断調査では、海外経験が上記の差を生み出したというように因果関係を同定することはできないが、海外経験は異文化との接触経験でもあり、この経験が何らかの形で、その後の英語教育への取り組みに影響した可能性を示唆している。また国際的志向性項目の中には、異文化へのオープンな態度や異文化背景を持った人との接触到に積極的かどうかを測る項目が含まれており、こういった態度を養うために異文化との直接接が何らかの効果をもたらすことを示唆している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

1. Yashima, T., Ikeda, M. & Nakahira, S., (2016). Talk and silence in an EFL classroom: Interplay of learners and context. In J. King, (ed.) *The dynamic interplay between context and the learner in second language learning*. (Pp.104-126). Hampshire, UK; Palgrave Macmillan. (査読あり)
2. Yashima, T., MacIntyre, P. & Ikeda, M. (2016). Situated willingness to communicate in an L2: Interplay of individual characteristics

and context. *Language Teaching Research*. 1-23. DOI: 10.1177/1362168816657851 (査読あり)

3. 八島智子 (2016) 国際協同プロジェクト参加を通しての「学びの質」『関西大学外国語学部紀要』15号 p.33-50. (査読なし)
4. Denies, K., Yashima, T., & Janssen, R. (2015). Classroom versus societal willingness to communicate: Investigating French as a second language in Flanders. *The Modern Language Journal*, 99, 718-739. (査読あり)
5. 守崎誠一 (2015) 「コミュニケーション教育は可能か」『日本コミュニケーション研究』, 44, 37-45. (査読あり)
6. Yuri Okunishi, Tomoko Tanaka, Hongru Tian and Yutian Bai (2015) Identifying Contrasting Chinese and Japanese Cultural Values: Implications for Intercultural Youth Education. *Open Journal of Social Sciences*, Vol 3, No.9, 34-38. (Scientific research publishing)(査読あり)

[学会発表](計 10 件)

1. 八島智子(2016). コミュニケーション学と **SLA**(第二言語習得論)の交差点—Willingness to Communicate— 講演 日本コミュニケーション学会(JCA)中部四国支部秋季大会 December 4, 2016 福山大学 宮地茂記念館(広島県)
2. Yashima, T. & Nishida, R. (2016). *Influence of learner beliefs and gender on the motivating power of future L2 selves*. Paper presented at Psychology of Language Learning 2 Conferene, August 23, 2016. Jyväskylä, (Finland).
3. 小島直子・八島智子 (2016). 自己決定論と The 12 Motivational Self System の視点から見た英語開講講座における動機付け 外国語教育メディア学会(LET) 第56回全国研究大会 2016年8月8日 早稲田大学(東京)
4. Yashima, T. (2016). *Motivation and willingness to communicate: An Asian EFL Perspective*. Keynote Speech (基調講演) The 33rd International Conference on English Teaching and Learning. May 29, 2016, at National Changhua University of Education. Changhua, (Taiwan).
5. Yashima, T. (2015). *Imagined L2 selves and motivation to communicate*. Plenary Speech

(基調講演) JALT 2015, 41st Annual International Conference on Language Teaching and Educational Materials Exhibition. Nov. 22, 2015, Shizuoka Convention & Arts Center “Granship,” (Shizuoka).

6. Yashima, T. & Ikeda, M. (2014). *Emergent motivation to communicate in an L2: Interplay of individual characteristics and contextual factors*. Paper presented at International Conference on Motivational Dynamics and Second Language Acquisition, August 28th - 30th, 2014, Nottingham, (UK).

〔図書〕(計 6 件)

1. Yashima, T. & Arano, K. (2015) Understanding EFL learners' motivational dynamics: A three-level model from a dynamic systems and sociocultural perspective In Dörnyei, D., MacIntyre, P.D., and Henry, A. (Eds.) *Motivational Dynamics in Language Learning*. (Pp.285-314). Multilingual Matters.
2. Yashima, T. (2014). Self-regulation and autonomous dependency among Japanese learners of English. In G. Murray and R. Smith (Eds.). *The social dimensions of autonomy in Language learning*. (Pp. 60-87.). Palgrave Macmillan.
3. Yashima, T.(2013). Agency in second language acquisition. C. A. Chapelle (Ed.). *The Encyclopedia of Applied Linguistics*: Ohta, A. (Ed.). Social interaction and complexity theory approaches to SLA. Wiley-Blackwell
4. Yashima, T. (2013). Individuality, imagination and community in a globalizing world: An Asian EFL perspective In Phil Benson and Lucy Cooker (eds.). *The applied linguistic individual: Sociocultural approaches to autonomy, agency and identity*. (Pp. 46-58). London: Equinox.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/%7EYashima/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

八島 智子 (YASHIMA, Tomoko)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：60210233

(2)研究分担者

守崎 誠一 (MORISAKI, Seiichi)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：30347520

(3)連携研究者

田中 共子 (TANAKA, Tomoko)
岡山大学・社会文化科学研究科・教授
研究者番号：40227153

(4)研究協力者

()